
春島戦記

阿波座泡介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春島戦記

【Nコード】

N8087Q

【作者名】

阿波座泡介

【あらすじ】

今の日本とよく似た世界で、戦争が起きました。

舞台は、春島と呼ばれる敵国との軍事境界線に近い島です。

春島には、定期的に『ブランカ』と呼ばれる巡航魚雷が打ち込まれます。

先の春島沖海戦で大破着底し身動きのできない敵の最新鋭潜水艦から撃ってきているのです。

そんな春島に住むユカリは同級生のアキトに誘われて、警報の鳴り響く中、『ブランカ』を見に行きます。

それは、ユカリが初めて触れる戦争でした。

『ブランカ』は、ユカリの父によって処理されますが、ユカリは倒れます。

その事件は、ユカリとアキトに確かな絆をつくりました。

そして、戦争は終わり。

春島には、日常が戻ってきました。

「おとうさん」

私の声が、意外なほどに大きく響いく。

受付のおばさんにジロリとにらまれたような気がする。

ここは春島の役場。

その一角にある、春島守備隊司令部なのだけれど。

「なんだ、ユカリか」

そして、守備隊隊長というプレートのある机に座っているのは、私のお父さん。

司令部と言っても、隊長用の机一つに電話とノートパソコンに古い無線機があるだけ。間仕切りの壁さえないのだから。

「お母さんが、お夕食は家で食べられますか？　って」

お父さんは、書類を扇子の代わりにして扇ぎながら。

「うーん。今日は来そうだからなあ」

と、思案顔。

「ブランカが来るの？」

お父さんに聞いてみたが。

「子供がよいな心配をするな」

と、お父さんは私の頭の手をおいて髪をクシャクシャにするように撫でる。

そんな風にされるのはイヤだと言っても、お父さんは聞いてはくれないのだ。

「お夕食、食べるなら、お母さんに電話してよね」

私はお父さんの手から逃れるように身をかえし、ジロリとにらむ受付のおばさんに小さくお辞儀をして、役場から飛びだした。

外は、真夏の日差しが強くて、ちよっとクラクラする。

沖から港に向かってふいてくる海風は、すぐに汗を乾かしてくれて気持ちがいい。

でも、こんな風がふく日は、ブランカが来るかもしれない。

そんなことを考えながら市場の前を歩いていると、サイレンが鳴り出した。

やっぱり、ブランカが来たんだ。

周囲の人たちが、足早に歩き出し。市場のおばちゃんたちも急いで商品をかたづけだす。

「早駆け！ 早駆け！」

と、大声が走ってきた。

守備隊の人たちだ。

みんな、ガチャガチャと騒がしい音を立てるブリキの箱を抱え、走って港へ向かっている。

たぶん、お父さんも港に向かって走っているはず。私も急いで家に帰ろう。

走りだそうとした私を、呼びとめる声がした。

「ユカリ！ ユカリ！」

振り向くと、クラスメイトのアキトくんだった。

「こっちゃん来いや」

アキトくんは、港へ向かう坂道に立っている。

「何をやってるのよ」

「こっちゃん方が安全じゃ」

ブランカが来たのに港の方が安全だなんて信じられなかったが。

「……ほんと？」

「ほんとうじゃ」

アキトくんは私の手を握ると、グイと引っ張って坂道を下りだした。

「ちょっと……」

待ってよ、と言おうと思った。

先生や父さんは、サイレンが鳴ったら港から離れて家でジッとしているように、と言っていた。

なのに、私は港へ向かっている。

でも、坂道を下る私の心は、なぜだかワクワクしていた。
危ないことをしているのに。

「こっちじゃ」

港まで降りた私たちは、さらに堤防へと向かった。

サイレンが今までに聞いたことも無いほどに大きな音で響いている。

見回すと、港の通りには誰もいなかった。みんな避難してしまっただろう。

私たちは海に突き出た堤防の先のコンクリート製の大きな塊の前にいった。

「これは？」

「知らんのか。ブンガじゃ。保塁じゃ」

アキトくんは、コンクリートの塊に建て付けられた重そうな鉄扉にとりつく。

サイレンが時々途切れて、その間隔が短くなってきた。
もうすぐブランカが来る。

「あぶないぞ。早よう入らんか！」

片手で鉄扉を開きながらアキトくんが叫んだ。
重そうに見えるけれど、鉄扉は軽く開くのかしら？

鉄扉をくぐる時、私が錆の浮いた取っ手をひっぱてみたけど動かない。

「閉めるぞ」

アキトくんは鉄扉を片手で閉める。

私とアキトくんでは、そんなにも腕の力が違うのかとビックリしてしまった。

それは、たしかに頭一つ分は私の方がチビなのだけけれど。

ブンガと呼ばれたコンクリートの穴倉は、分厚い壁に守られていて。見た目はたいそう安全そうな場所だったけれど。暗くてカビの臭いがして、なんだか気味が悪かった。

走ってきて乱れた息を整えようと深呼吸をすると、自分のではな

い汗の臭いにドキリとした。

二人きりだ。

そう思うと、心の底でゾワゾワするものが生まれる。

ブンガの入り口は、あの分厚く重い鉄扉だけ。

あんな重そうな扉を、私は一人で開けることができるのだろうか？
他には、小さな隙間のような窓があるだけの部屋だった。

こんな所で。

男の子と二人きりだなんて。

「なした？」

アキトくんの息が耳に触れ、私は小さく悲鳴を上げる。

「怖いんか」

怖かった。

「だって、こんな所に閉じ込められたら、怖いよ。暗いし」

それも本当だけれど、何か別のものが恐かった。

でも、それが何かが分からない。

「ほうか」

分からない？

本当に分からないのかな。

私の中で、何かがゾワゾワしている。

これは、何だろうか。

そんな考えは、急に目を射す光で中断された。

「なに？」

見ると、隙間のような窓が広く開いていた。

「これで明るいじゃろう」

アキトくんは、そのまま外を眺めている。

ブンガの外は港のなのに。

もうすぐブランカが来るのに。

「あぶないよ」

私の言葉なんか聞いていないのか。

「見てみい。ユカリの父ちゃんが見えるで」

と、嬉しそうに言う。

小さな窓から外を見ると、港の入り口の灯台の先に、ここと同じようなブンガがあった。

違うのは、ココより窓が大きくて大砲が置いてある事。そして、私の父さんがいること。

「特等席やぞ。ボ式機関砲がよう見えるじゃろう」

アキトくんは、大砲をボ式機関砲と呼んだ。

「あれは大砲と違うで」

アキトくんは言うが。

では、大砲とどう違うのか？ と、訊ねたら。

「違うもんは違うんじゃ」

と、言う。

それでは分からないのと同じではないかしら。

私たちの国が、隣の国と戦争を始めたのは今年の春だった。

先生たちは、奇襲をした隣の国を卑怯だとののしった。

けれど、父さんは。

「奇襲を受けたのは、受けた奴がマヌケなんだ」

と言う。

ニュースでは大騒ぎをしていたが、島の生活はそんには変わらなかった。

戦争が起こってからも授業はあるし、テストもあった。通知表も渡された。

変わったことは避難訓練と防火訓練が週に2回くわったこと。

そして、お父さんは予備役から招集され、この島の守備隊長になったこと。

そんななか、夏の前に、島の沖で海戦があって大勝利だったらしい。

らしい、と言うのは。ニュースで聞いたただだからで。

海戦があつたはずなのに、軍艦も見えないし大砲の音も聞こえなかった。アキトくんは、海戦といつても潜水艦同士の戦いだから島からは見えないと言う。

すぐそこで戦争があつても見えないなんて、信じられなかった。

でも、その海戦……春島沖海戦と呼ばれているらしい……から数日して、島にブランカが来るようになった。

春島の港を出たところで輸送船がブランカに当たって沈み。

その次の日は、ブランカが港に入り込んで繋いであつた漁船が壊れた。

おかげで夏休みに入る頃には連絡船も来なくなり、食料とか日用品は空軍の飛行機が運んできた。

この飛行機も、アキトくんが言うには『オスプレ』なのだとか。空を飛ぶ機械は飛行機だと思ふのだけれど。

それからのお父さんは忙しかった。

村の倉庫から大砲……ボ式機関砲ね……を運んできて港に据えたり。島の岬に小屋を建てたり。あちらこちらに電話をしたり。無線機まで持ってきて台所に置いたりして。それで、お母さんがカンシヤクをおこして。

もう、大変だった。

それからは、週に一度くらいサイレンが鳴り。お父さんは海岸に走り。私たちは家に走って帰り。しばらくすると、港から大きな音が響いてくる。

夏休みの始めは、そんな調子だった。

「来たで。ブランカじゃ」

アキトくんが呟いた。

私には何も見えなかった。

「アレじゃ。アソコじゃ」

アキトくんが指差す先の海の中に、白い何かがこちらに向かって来るのが見える。

先生が言うには、ブランカとは隣の国の言葉で『白い嵐』と言う意味らしい。

本当に白いのだと、はじめて知った。

「アレが……」

と、呟いたとき。

超特大の電気鋸が廻るような音が響く。

その音が合図のように、海がチャックを開かれたように割れて、水の壁が生まれた。

「す……あた……ふせ……」

アキトくんが何かを叫んだようだけれど、よく聞こえなかった。瞬間、海が光ったように見え。

ユラリと揺れた海がもちあがり。

もちあがつてふくれた海が破裂したように割れると。

何か白い柱のようなものがグングンと空に登っていった。

それが、水柱なのだ気がついた時に。

ズンと響く揺れに襲われ、私の体から空気が抜けてしまう。

そして、海の底で獣が吠えるような、オオオンと響く音が続き。

空気が抜けた私の体を揺さぶった。

しばらく、何も感じなかった。

アキトくんが、何かを叫んでいたのだけれど、聞こえているはずなのに、何も分からないでいた。

なんだか急にシクシクと痛み出したお腹が、私を正気にもどしてくれる。

「すごいな！ ユカリの父ちゃんは。あのブランカを、ハイテク魚雷を、今日も一射でしとめとる」

はしゃぐアキトくんの声が、頭にガンガンと響く。

「……ねえ、なんで？」

「なんじゃ？」

「海戦で勝ったのに。なんで、この島にブランカが来るの？」

「父ちゃんに聞いとらへんのか？」

私は頷いた。

父さんは、戦争のことを聞いても何も話してはくれない。時々、よく分からないことを呟くだけ。

「つまりじゃな……」

アキトくんの説明によると。

海戦で敵の潜水艦は重傷で動けなくなって、海の深いところに隠れてしまった。

あまりに深くて、どここの潜水艦でもいいけないほどに深い海の底に。でも、敵の潜水艦も動けないし誰も助けに来てくれない。

だから、動かなくても攻撃できる近くの手や島を狙っているらしい。

「敵の潜水艦は、動けないほど重傷なんだよね」

「そうじゃ。そういうんはな、大破って呼ぶんじゃ」

「そんなになって、なんでブランクを使うのかな？」

「……え？」

きょんとした顔のアキトくん。

私は、変なことを聞いているのだろうか？

痛くて痛くて動けないのに、なんでそんなことをするのか分からなかった。

「それが……軍人だから……じゃ」

アキトくんは、自信のなさそうな声で答えてくれた。

「なんにもない、この島を攻撃するのが？」

「……それが、戦争じゃ」

シクシクとお腹が痛み、私は我慢ができなくなって座り込んだ。

「おい、大事ないか？ 腹が痛いんか」

大丈夫と言おうとした。

でも、お腹に力が入らなくて、声が出ない。

冷たいコンクリート壁に触れている背中が鈍く痛みだして、体を起こそうと床に手をついたら。

ヌルリと生暖かい感触が触れた。
驚いて、手を見ると。

「うっ、うわああああ！」

アキトくんの悲鳴だった。

私の手を見たアキトくんが叫んで逃げようとしている。

私の手は、真っ赤に濡れていた。

「あ……や……」

声がでなかった。

アキトくんは、私に背を向けている。

どうして？

アキトくんは、鉄の扉に手をかけて開こうとしている。
なんで？

「たす……」

私の声が聞こえないの？ アキトくん。

私、たすけてって言ってるんだよ。アキトくん。

「うわあああ！」

鉄の扉を開いて、外に出て行こうとするアキトくん。

待って。

いやだよ。

こんなの、いやだよ。

私は、アキトくんの足をつかんでいた。

足をつかまれたアキトくんは扉の縁でころんでしまう。

でも、その拍子に、私はアキトくんの足をはなしてしまった。

「まって……おね……が」

私の言葉は、アキトくんが鉄の扉を閉めた音にかきけされてしま
う。

ひとりだった。

鉄の扉を閉ざされたブンガの中は、島の中にあるはずなのに、知
らない場所だった。

この血は。私の手を濡らした血は、どこから流れてきたのだろうか。

私が流した血にちがいない。

お腹が痛いから、お腹を怪我したのだろうか？

でも、何時？

たぶん、ブランカが爆発したとき。

あの爆発で、私は知らぬ間に怪我をしてしまったのだろうか？

むせるような血の臭いで息が出来ない。

目が眩み、お腹と一緒に頭もガンガンと痛む。

どちらが扉なのかどころか、上と下の区別もむずかしい。

「いや……だよ……」

こんな所で。

一人でなんて。

イヤだよ。

だれか。

アキトくん。

先生。

お母さん。

お父さん……。

「ユカリ！」

お父さんの声だった。

気がついたのは学校の医務室。

校医さんは、オメデトウと言ってくれ。

しばらくして、私は遅い初潮を迎えたのだとわかり。

なぜだか、恥ずかしくて顔が真っ赤になってしまっう。

家ではお母さんが急いで赤飯の準備をしていた。

もう、たまらなく恥ずかしかった。

恥ずかしがることではないのに。
なんで、こんなに恥ずかしいのだろうか。

日が暮れて、月がでた頃。

わが家に来客があった。

大きなスイカを抱えたアキトくとアキトくんのお父さん。

アキトくんのお父さんは、何度も何度も頭を下げて謝ってくれた。
そしてお父さんも、俺の方も勘違いをして、と何度も何度も頭を下げている。

大きく腫れあがったアキトくんのホッペを見ると、お父さんがアキトくんに何をしたのか分かった。

あの時、ブंगाを逃げ出したアキトくんは、走ってお父さんのいるブंगाまで行って「大変だ。大変だ」と叫んで泣き出したとか。

一人でおきざりにされたのには腹がたったけれど。そんな姿のアキトくんを想像してしまうと、許してあげようと思ってしまう。

「ユカリ、おれ！」

突然に、アキトくんが叫んだ。

アキトくんは真っ赤な顔で。

「おれ、責任をとるから」

と、言った。

私はビックリした。

それ以上にビックリしたのは、お父さんで。

大声で怒鳴るお父さんに、私は。

「アキトくんを許してあげて」

と叫んでいて。

その時のお父さんの顔は、忘れられない。

夏祭りの日に、島の沖に軍艦が来た。

「あれは駆逐艦だ」

お父さんが呟いた。

軍艦と駆逐艦って違うのだろうか？

「どうなるの」

「降参しないか、と警告する」

「降参するのかな？」

「しないな」

「なぜ？」

「我が軍の潜水艦でも追えないほどの深深度から魚雷を撃てるなら、敵は最新鋭だ。降伏するはずもない」

なら、どうなるのだろうか？

「動けないのでは、最新鋭でもただの標的だ」

死んじゃうんだ。

あの潜水艦は。

深い深いだれも助けにいけない海の底から、ブランクを撃つことしかできない潜水艦は。

駆逐艦は、大きな大きなラグビーボールのようなものを落としていった。

「終わったな」

父さんが呟いた。

大きな爆発でも起こるのかと思ったが、何も起こりはしなかった。あとで、気がついたのだが。

私がお父さんと戦争の事をちゃんと話したのは。その時が初めてだった。

そういえば、海を眺めながらお父さんが。

「あいつら海流をよく知っている。うまく港に流しやる」と、呟いていたことがあった。

まるで、友達のことでも話すようだったけれど。

あれは、あの潜水艦のことなのだと、その時になって気がついた。

その日の夕方、アキトくんは私を迎えに来てくれた。

一緒に祭りにゆく約束をしていたのだけれど。

意外だったのは、お父さんが反対をしなかったこと。

「いっておいで」

と、私を送り出してくれた時に。

いつもなら、頭をクシャクシャとなでるのに。

その日は、ソツと肩に手を添えて送り出してくれた。

夏祭りの日から、ブランカは来なくなった。

夏休みが終わり。新学期がはじまり。始業式の日に大事件がおこった。

登校してみると、クラスの黒板にはアイアイ傘にアキトくんと私の名前が書かれ。その上『セキニンとるから』とまで書いてあった。それはもう、恥ずかしくて、クラスから逃げ出したかったけれど。後から来たアキトくんは、黒板のアイアイ傘を見ても気にしない様子で私の隣に立って手を握ってくれた。

それを見た友達は、さらに騒いだのだけれど。アキトくんは私の手を離しはしなかった。

アキトくんという責任とは、このことなのだとわかり。私は、少し恥ずかしくて、すごく嬉しかった。

そして、戦争が終わったのは秋のこと。

どちらが勝ったのかは、よく分からない。

港からは大砲が消え。

お父さんは、予備役に戻った。

冬になってから、アキトくと港が見える岬に行ってみると。

大きな白い柱が建っていた。

それは、一目でブランカの破片だと分かった。

誰かが、海の中からブランカの破片を拾って、ここまで運んできて建てたのだろう。

その柱には、何か分からない記号と手書きの文字が書かれていて、その文字は読めないけれど、びっしりと書いたある文字を見るたびに。私は、遠くの友達に出す手紙のことを思い出してしまふ。

そして、また春がきて、夏になって。

夏祭りの日。

お父さんが、白い柱に牡丹餅を供えるというので、ついてきた。港の見える岬の白い柱には、花や魚やお菓子やら、いろんなものが供えられていた。

たぶん、島中の人が何かを持ってきて供えたのだと思う。

わたしたちは牡丹餅を供えると、お父さんは敬礼して、私は手を合わせる。

たぶん来年の夏祭りの日にも、いろんなものが供えてあるのだろうな。

遠くから、祭囃子の音が聞こえてくる。

「今年も……アキトくんと、いくのか」

お父さんが聞いてきた。

「うん、いくよ」

私は答えた。

「あまり、遅くなるな」

お父さんの手が、私の肩にちよつと触れて、ひっこんだ。

|||||

初投稿です。

以前に別の小説サイトに投稿した原稿です。
よろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087q/>

春島戦記

2011年2月11日00時10分発行